

みたび

## 二度のくじ引き

石川晋一

一

都の西北、山城と丹波を分ける愛宕山。その中腹に勇猛果敢な戦神として遠い昔より武人の信仰を集めている勝軍地藏と、天狗の姿をした愛宕権現太郎坊を祭る愛宕神社がある。

丹波の国亀山城主明智光秀は出陣の前には、この愛宕神社に参詣するのを常としており、今回の中国出陣に際しても、戦勝祈願のため斎藤利三を初めとする主だった重臣たちを連れ、この地を訪れることにしていた。

「明日は夜の明けきらぬ内に亀山を発つ。そのつもりで出立の用意をしておくよう」と斎藤利三に命じた後、光秀は何時になく早く寝所に向かった。

今夜は明日の参詣をひかえ身を清めるため、一人寝である。

どれほどの時が過ぎたであろうか？

城中の者も、皆、明日に備え早々と寝入ってしまったのか、物音一つしない。この世にただ一人取り残されたかのような怖いほどの静寂の中で、光秀は何度も寝返りをうち続けていた。一向に寝付かれず、眠気は全く感ぜず、かえって頭が冴えてきている。

『本能寺に泊る』

この一言が脳裏から離れない。

静けさが深まれば深まるほど、『僅かの供で……』の囁きが繰り返され、寝返りの数が増せば増すほど、『本能寺に……』の小声が波のように止む事無く耳の奥に押し寄せた。

「やるか？」

数日前から密かに心の奥底に仕舞い込んでいた言葉を、弱く、そして小さくはあったが、ついに口にした。

この一言が静けさの中で存外に大きく響いたことに、光秀は心を動揺させたが、『やるか』の言葉が、次に、「易々とは帰ってこぬ」との言葉を誘い出した。織田家の家中で一番の鋭い頭脳と冷静な理性を持った光秀である。織田家の武将たちの現状を客観的に、そして的確に分析することはたやすかった。

この頃、勢力の伸張著しい織田信長は、既に、今で言う兵農分離と軍団制を完成させており、春の田植えや秋の収穫期には出陣を控える、と言った季節的制約には一切とらわれることなく、適宜、軍団を編成しては、東西南北の敵に対して同時並行的な天下統一の戦を挑んでいた。

因みに、この時の軍団長格の武将たちの状況を見ると、筆頭宿老柴田勝家は北陸路で上杉勢と対峙、羽柴秀吉は中国方面で毛利氏と交戦中、丹羽長秀は四国攻めの準備で大阪にと、夫々の軍団を率いて出陣しており、信長の近く、即ち、京および安土には光秀配下の兵しか存在しなかったのである。

光秀に取って信長を討つには、まさに、千載一遇の好機と言えた。

「武将として生を受けた者が……」と闇に向かって語りかけ、「天下を望むのは、至極自然なことではないか」と寝返りをうちながら呟いた。

「この機会を逃しては……」

低い声が闇の中に吸い込まれていった。

「……次は無い」

寝返りをうつ音だけが時折聞えていたが、その静けさを溜息まじりの暗い弱々しい声が破った。

「……この様な日々はもう終わりにしたい……」

隣国美濃を切り従え岐阜城に入った尾張の信長が京の都を目指し始めた頃は、信長にとっても天皇・朝廷や足利將軍家と言った古い権威を持つ体制との協調が必要であり、その間を取り持つ役割を光秀が一手に担っていた。が、しかし、今や信長はこれらの体制を凌駕するほどまでに力をつけ、既に、天下を手中にした後を考え始めていた。

その構想の中では、古い権威は邪魔であり、また、無用でもあった。

稀代の革命児である信長には、それらと調和を保ち共存して行くことに不都合があれば、何のためらいもなく捨て去る心の準備も出来つつあった。

（信長公が古い権威との決別を決めた時、己も共に葬り去られるのでは？）と、己の先を見通せる鋭い頭脳故に、光秀は、日夜、気に病んでいたのである。

「今、事を起こすのが最良の策ではないか？」

信長に対抗し得る勢力としては、甲斐の武田はこの年の春に滅んでしまったものの、中国の毛利、四国の長宗我部、越後の上杉、更に、関東には北条等々が存在している。また、信長に都を追われた十五代將軍足利義明も、毛利家に身を寄せてはいるが意気軒昂であっ

た。光秀が京を固め、毛利、上杉、長宗我部等の兵が時を同じくして四方から戦を仕掛ければ、いかに織田の軍団が強力といえども、到底、支えきれぬものではなかった。

「そのようなことは珍しくはないわ！」

光秀はにわかに顔色を変えると、上半身を跳ね起こし、姿の見えぬ相手に向かって低い挑みかかるような声を投げつけた。

「信長公も弟君をその手にかけてではないか！」

耳鳴りの様に響いた最も触れたくない言葉、『主殺し』<sup>あつし</sup>に対する反撃が、『信長公』と言う禁句をこの世に送り出すと、この言葉が独り歩きを始め、光秀を得体の知れぬ重圧から解放し、更に、過激な言葉をその口から飛び出させた。

「やるぞ！」

神経質な震えを帯びた、尖った声が静けさに突き刺さった。

「やられる前にやれと言う戦国の世ではないか！」

「殿！ 如何なされましたか？」

寢所の外に控える若侍の声が、光秀に冷静さを取り戻させた。

「大事な！」

寢所に、再び、静けさが戻ると、光秀は（天下が廻って来た。強運が向いて来たに違いない）と確信した。

「神がこの機会を与えてくれたに相違ない」

小さくはあったが、己を得心させるような口調で呟いた。

「神のご意志には素直に従わねばならぬ」

この時、光秀の心から自制と言う重石がとれ、己の思いが神の意志へと変身したのである。

今や、夢が現実のものとなり、神からその実現を命ぜられたかの如くに、光秀は具体策を口にした。

「先ず、天皇様、お公家衆にご挨拶か」

信長を討ち取ったことを、古い権威から『良きこと』と認めて貰うのである。光秀は、これにより、『主殺し』の汚名から己の心を解放し、同時に、この行為を世にも受け入れさせようと考えていた。

「次に……」

闇に流れた凍とした声が、当代一流の戦略家明智光秀の切れ味鋭い頭脳を暗示している。

「諸將に命令を出す」

己の行為を正当化した後、『束ね役』である天皇、あるいは足利將軍家の名を借りて、毛利、上杉、長宗我部等々の諸將に、『光秀に味方し、織田の軍団を撃ち破れ』と命ずる戦略である。

この命令が諸將に『義』と言う心地良い響きを持った名目を与え、反信長勢力を、即座に、結束させ、一方では、信長を失い求心力が衰えた織田の各軍団を、一気に、逆賊に変えるのである。

(古い権威が織田軍団壊滅の役割を担ってくれる)と安堵して、光秀は顔を和らげた。が……、何処から入り込んだか、微かな低い羽音をたてて一匹の虫がゆらゆらと燃える炎の中に飛び込んだ。

深い静寂の中ではその焼ける音さえが聞えるようであった。

「畏？」

己が気付かぬ内に、既に、何処にも逃げ場のないほどに追い詰められているかのような恐怖にかられ、背筋に冷たいものを感じて思わず身震いをした光秀は(その恐怖から立ち直ろう)と、大きく息を吸おうとした。が、信長の鋭く冷たい視線に胸が痛みを覚えるほどに締めつけられ、ままならなかった。

「隙を見せ……」

光秀は乾いた唇で喘ぎ、薄ら笑いを浮かべた信長の冷酷無情な細面の横顔を思い、蒼ざめた顔を硬く引き攣らせていた。

「物陰からじっと窺っているのでは？」

夜は深ける。

寝所には物音一つしない静寂が続いている。

その静けさの中に、救いを求め何かにすがるようなかぼそい声がした。

「なに……、油断されているだけじゃ」

石山本願寺の頭如上人と和睦し、一向衆との戦が終わった今では、確かにこの畿内には面と向かって信長に弓を引く者はないのも事実であった。

すると、揺らめいていた小さな炎が風も無く、突然、消えた。

(神が『思い悩まず全てを任せ、眠りにつけ』と告げている)と理解した光秀は、

「他に術はない」と投げやりな声をあげ、目を閉じた。

漆黒の闇の中に静寂が流れていった。

「やるか？」

寝返りの音と共に、ぽつりと低いかすかな呟きが聞えた。

光秀は、主、<sup>あるじ</sup>信長を討つ決心はつかぬものの、一方では、(己に天下が廻って来た。強運が向いて来た)との思いも捨て切れず、(明日、みくじを引けば、必ずや、『取って替われ』と告げる『大吉』が出るに違いない)と強く期待していた。主を討つことを、(己の考えでなく、神の命としたい)との願いもあった。

静寂の中、光秀一人を残して夜は深けていく。

暗い寝所には、(明日、神のご意志が明らかになる)との思いが色濃く流れてはいたが、寝返りの音も、また、果てることなく続いていた。

## 二

早朝の清々しい空気や鳥のさえずりが愛宕の山を包み込み、愛宕神社の境内には全ての命あるものを活き活きと甦らせる澁刺とした精気が満ち満ちていた。

が、新緑の眩しさが映える石段の下には緊張し切った光秀が、疲れ蒼ざめた顔で立ちすくんでいた。

目前の石段は長く高く、拒むかのようにそびえ立っている。光秀は口を固く結び、思いつめた表情で、はるかに天にまで続いているかのような石段を充血した眼で眺めていたが、ふと、視線を上に向けると、石段の上には果てしない青空が広がっていた。

その青さと広さが、光秀に力を与えた。

光秀は(この石段の上にある愛宕神社のみくじさえ引けば、必ず!)と強く感じ、(憂鬱からの解放と、天下取りを告げる『大吉』が出るに違いない)と大きく息を吸った。

光秀は、今一度、心の中で(必ず出る!)と大きく叫び、気を奮い立たせようと、「いざ!」と腹から低い声を搾り出して、石段に足をかけた。

一段、一段、足元を慎重に確かめ、確かめ、気の遠くなるほどの時間をかけて

登り切った時、境内には、光秀を暖かく受け入れるように五月の明るい太陽が木立の葉からこぼれ落ちていた。

出陣の一切を任されている斎藤利三は、手短かに参拝を済ませ、一刻も早く城に戻りたが

つたが、光秀は、常の光秀らしくなく、その願いには一切耳を傾けず、即座に、「闇に閉ざされるのを待つ」と強く、突き放すように言い切った。

（神に全てを託すには、夜の暗さが欠かせぬ）と考えていたのである。

光秀は、限りなく降り注ぐ太陽の活力を身体からだの芯にまで取り込もうとするかのように、ただ、ただ、目を閉じ、仏像のように微動だにせず、光の中にたたずんでいた。が、しかし、その心の内は激しく揺れ動いていた。

（信長公は、強いお人なのだ）

信長は天下布武を阻む者とは一切の妥協をせず、世の秩序や伝統的な権威を否定することに何の疑いも、また、ためらいもない。長い歴史と人々の心の支えとなってきた比叡山延暦寺すら躊躇なく焼き払い、権威の象徴である足利将軍も都から追放した。

稀代の革命児である。

光秀は（朝廷さえ無用のものとするかも知れぬ）と密かに恐れ、（その時はどうすればよいのか？）とその心を痛めていた。

（主、信長の命であっても、果して、天皇に刃を向けることができるのか？）

光秀は永い伝統を尊重し、古い権威を深く敬う人間であった。

（信長公は、厳しいお人でもある）

光秀は美濃の名門土岐氏の流れを汲んではいるが、諸国を流浪し辛酸をなめた。信長のもとに身を寄せた後は、諸国流浪で得た経験や人脈をもとに、切れ味鋭い頭脳を駆使し、持てる才能を出し切って与えられた役目を務め、誰もが目を見張るような成果を次々とあげ、丹波亀山と琵琶湖畔の坂本に二つの城を持つまでに出世した。

これまでの苦勞が大きかっただけに、光秀はその成果に対する執着心も、また、人一倍強かった。しかし、信長は長年仕えてきた累代の重臣佐久間親子さえ、『役立たず』の一言でいとも簡単に放逐してしまう主である。

光秀には（手にしたこの地位や待遇が、これからも末永く保証されるのであろうか？）との不安があり、（既に、自分も『役立たず』になってはいないのだろうか？）との怯えを常に感じ、（信長の気まぐれで、突然、追放されるのでは？）と、片時も心の休まることがなかった。

（信長公は、恐ろしいお人じゃ）

一向宗の立てこもる石山本願寺を攻めたおり、摂津の猛将荒木村重の部下が密かに敵方に兵糧を送っていたのが発覚した。織田方の陣営には大きな驚きと怒りの声が満ち満ちた

が、信長は何も言わなかった。が、村重をも疑っていることは明らかであった。この沈黙の重圧に耐え切れず、村重は叛旗をひるがえし、そして討伐されてしまった。

光秀も同じ立場にあった。

武田勝頼の滅亡後、信長の良き同盟者である徳川家康が駿河一国を貰ったお礼に安土の城を訪ねて来ると、信長はこれを大層喜び、自ら光耀く新装の大天守閣に案内して眼下に広がる青い琵琶湖を見せ、光秀には馳走役を申し付けた。

光秀はこれまでの長年にわたる足利將軍家や公家衆との交わりの経験から、馳走役の役目には格別の自信があった。誠心誠意心を砕き、その接待の出来栄えには、(家康は無論のこと、信長公も満足され、さぞかしお喜びになられるであろう)と、心が躍るまでに自画自賛していた。

ところが、信長から思いもかけぬ叱責を買い、面罵され、痛打され、額からはとぼしる鮮血と共に役目を解任されて、「急きよ軍勢を率いて中国に向かい、秀吉の組下に入れ」と申し渡されたのである。

(馳走役のような儀礼的な役目は、家中第一である)との自負が微塵に打ち砕かれ、その上、今まで同格であった秀吉の配下に入れとの、屈辱の降格命令まで受け、光秀は武将としての自尊心も、また、冷酷非情に奪われたのである。

光秀は(今後、この冷遇に耐えていけるのか?)との暗澹たる思いと(己が不満を持っていなくとも、信長公が疑えば、荒木村重と同じ運命をたどるのでは?)との絶望感に打ちのめされていた。

(信長公は、許さぬお人でもある)

天正六年(一五七八)三月、信長は光秀に丹波随一の豪族波多野秀治兄弟の居城八上城を攻めるよう命じた。しかし、その守りは固く容易に落ちなかった。そこで光秀は力攻めを止め、腰を落ち着けて長期戦を覚悟した兵糧攻めに戦術を替えた。信長よりは、城に火を放ち、早期に決着させよ、との催促が幾度となくあったが、光秀にはそのような残酷な戦は出来なかった。

そして一年有余の間、波多野勢は草根木葉まで食い尽くして、耐えに、耐えた。八上城の食糧が底をつくのを待ち、光秀は波多野兄弟に、「信長公の目的は天下布武にあり、決して波多野一族を滅ぼすことではない。兄弟が真摯に恭順の意を示せば、城兵の命と所領は安堵する」と開城を持ちかけ、その言葉が偽りでないことの証として、己の母を八上城に入れた。

波多野兄弟はその言葉を信じて城を出た。

光秀は信長のもとに彼らの身柄を送り、己の約した開城の条件の了承を得ようとした。が、信長は、光秀の母親が八上の城内に居ることを承知の上で、即刻、兄弟に切腹を命じたのである。

光秀は必死に彼らの助命を乞うたが、全く相手にされなかった。

信長は、条件の内容が云々ではなく、己の許可なくして光秀が一存で波多野方と処置を決めたことを許さなかったのである。

八上城では光秀が裏切ったと怒りが爆発した。

『即刻、磔にされた』との報告を、光秀は、心中で、押えても、押えても激しく燃え上がる怒りの炎を悟られぬために両の目を閉じて聴いていたが、膝に置いた固く握った両の拳は小刻みに震え、その眉間には険しい皺が何本も、深く、深く刻まれるのを止めることはできなかった。

(そして、信長公は、狂人じゃ!)

武田勝頼を自害させ甲斐に入った信長は、以前攻め滅ぼした近江の六角承禎の遺児が恵林寺にかくまわれているのを知った。信長は、「差し出せ」と命じたが、住職の快川和尚は、「窮鳥懐に入れば、獵師もこれを殺さぬもの」と拒絶した。信長は、己の命に従わぬ快川和尚に激怒し、「恵林寺を焼き尽くせ!」と、光秀に命じたのである。

光秀は、「彼らには何の力もなく、焼いて何の意味がありませんか? 何卒焼き討ちは思いとどまり下さい」と、顔を蒼白にして決死の様相で諫言した。しかし、信長は頑として聞き入れず、こめかみに青筋を立てて気が狂ったように光秀を鞭で叩きのめし、きつく「火をつけよ!」と命じた。

信長は、己の命に従わぬことに激怒しており、快川和尚や光秀の説く正論を冷静に聴く耳は持ち合わせていなかった。

快川和尚は、百五十余人の僧侶と共に、「参禅不必須山水、心頭滅却すれば火もまた涼し」と泰然と言い放って、燃え盛る炎の中に消え、恵林寺の堂宇三十四、仏像・法具・經典等の寺宝も全て灰燼にきしてしまった。

数え切れぬほどの白い煙がゆらゆらと空しく立ち昇るのを見て、光秀は(これまでも、比叡山や長島の一向一揆等々、敵対するものどもには、信長公の下知に従い、不本意ながら、焼き討ちや女子供までも皆殺しのような残酷な戦をしてきた。だが、これらには彼らが信長公に従わぬため、との明確な理由があり、天下布武と言う大きな目的の達成には

やむを得ぬことである。織田の軍団が、日夜、各地で繰り広げている戦は、一日も早く戦のない世、無為に人が死ぬことのない世を創り出す、産みの苦しみなのだ、と己を納得させてきた。しかし、恵林寺に火をかけたような、無益の殺生、鬼でなければ出来ぬような残酷非道な仕打ちは、広く世のために身体を張ってでも阻止せねばならぬ」と涙を流した。

焼けて無惨な姿に成り果ててしまった仏像の前に立ち、光秀はその理知的な整った顔を（狂人は除かねばならぬ！）との義憤で蒼ざめ、（これは己に課せられた使命なのだ！）と、胸中で叫んでいた。

何時しか、長い、長い時が過ぎた。

既に、雲ひとつない、抜けるような青い空に耀いていた明るい太陽も西に傾きかけていた。光秀は地に長く伸びている黒い影を微動だにさせず、相変らずたたくみ続けていたが、今や、その身体の隅々にまで（討つべし！）との激情がふつふつと音を立ててたぎっていた。

後は、神の意志の証、『大吉』を手に入するだけである。

（みくじを引けばそれも成る！）

太陽の陰りと共に、その確信も胸中に満ち満ちていた。

今、光秀に残されたものは、ただ一つ、神に全てを託す夜の暗さが訪れるのを待つ『忍耐』だけであった。

### 三

既に、愛宕山そのものが漆黒の暗闇の中に身を潜めてしまっている。

ただ、一ヶ所、太郎坊の前だけが燃え盛る火で明々と照り出され、四方の闇からは「ホーホー」、「ホーホー」と寂しげではあるが、重々しく、『神意を問う時が至った』と告げる鳴き声が聞えた。

「殿」

斎藤利三が低い太い声をかけた。

「既に、充分に暗くなっておりますぞ」

だが、光秀はその声に何の反応も示さず、眠っているかのようにまぶたを閉じて、微動だにしない。蒼ざめた顔に炎の影がゆらゆらと揺らめいているばかりであった。

斎藤利三は肩で大きく息をすると、腹を据えたような顔付きになって口を閉じた。闇を背景に耀くように燃え盛る火が音を立ててはじけ、明るさを増した。と、突然、漆黒の闇の中で大きな羽音がすると、次の瞬間、獲物の哀れな叫び声が辺りの静けさを引裂いた。

(これこそ時が至った証)

光秀は静かに目を開き、まっすぐ前を見つめると、落ち着き払った確かな足取りで太郎坊の神前に向かった。

光秀は、軽く一礼の後、少しぎこちなくみくじを引いたが、その手は心なしか震えていた。

(神よ。ご意志をお告げ下さい！)

光秀が手にしたそのみくじは？

光秀の自信に満ちた、いや、焦がれるような期待に反し『大凶』と出た。頭から激しい勢いで引いていく血は、身体にも留まらず、一滴残らず流れ出ていくようで、光秀はめまいと虚脱感でその場に崩れ落ちそうであった。

時としてかすむが、紛れもない『大』と『凶』の二文字を虚ろな目で眺めて、光秀は狼狽し、思考力の極度に落ちた頭脳で必死に考えていた。

(何故だ？)

光秀は、土色になるまでに憔悴していた。

(神はこのことをお望みではないのか？)

光秀は魂が抜けたような顔付きで『大凶』のみくじを手にして、(何かが変だ？)、(『大凶』の意味が判らぬ？)、(神意は何だ？)と、時間そのものが存在しないかのような長い間、たたずみ、眉間に皺を寄せ、その明晰な頭脳を忙しく働かせていた。

燃え盛る火がその姿を照らし出し、大きく、小さく、そして右に左に揺らせている。

どれほどの時が過ぎたであろうか？

深く暗い森の奥から「ホーホー」と、再び、辺りの静けさを破る鳴き声が聞えてきた。と、突然、光秀の脳裏に光が走った。

(そうじゃ！ 神は覚悟を試されているのだ。これほどの大事を執行するに当たり、『大凶』が出れば取り止めるような腹の据えようでは、神のご加護もなく、成功もおぼつかぬ)

光秀は大きくうなずき、(神が己の意志の強さを試そうと、あえて『大凶』のみくじを引かせたのだ)と得心した。

「これこそ、『大凶』の文字の意味するところなのだ！」

自信に溢れた声を発した光秀は、崩れ落ちそうなまでにうろたえていた己を恥じていた。「もう一度みくじを引こう。そうすれば神の御心が明らかにされるに違いない！」

決意と確信の言葉を力強く口にし、(神意を明かし給え!)と心で叫び、肩で大きく息を吐いた光秀は、再び、みくじを取りあげた。

だが、みくじは非情にも、再度、『大凶』を告げていた。

光秀は二度続けての『大凶』に、一瞬、顔を引き攣らせたが、直ちに、その蒼ざめていた顔には血の気が戻った。

「神よ」

そう呼びかける光秀の知性溢れる顔には、喜びの風情さえが浮かんでいた。

「もう一点の迷いもありません。必ず、見事討ち取ってご覧にいきますぞ」

凜とした口調で言い切った光秀は(是非、神意を!)と強く念じ、(今度こそは!)と鋭く叫んで、三度目のみくじを引いた。

ついに、神はその真の意志を示したのか、その手に固く握られたみくじには黒々と大きく『大吉』と書かれてあった。

光秀は、勝ち誇り嬉しそうな目でそれを、何度も、何度も確認すると、(やはりそうであったか)と己の判断の正しさを喜び、会心の笑みを浮かべた。

しばらくの間、満足し切った光秀の顔が、揺らめく炎を映して赤く燃えていたが、怒涛のような興奮が冷めるや、光秀は大きく深く社殿に頭を下げると、傍らに神妙な顔つきで辛抱強く控えている齋藤利三に、一言、「参る!」と力のこもった声をかけ、自信に満ち溢れた足取りで太郎坊の神前を離れた。

その背を、己の才覚だけを頼りにこれまで何度となく修羅場を乗り越えてきた歴戦の勇士齋藤利三が(辺りが暗くなるまで待ち、三度までもみくじを引いた主の行動は、己には全く解せない)と言った顔つきで追っていた。

翌、二十八日、光秀は西坊に移り連歌の会を催し、『時は今、雨がしたしる皐月哉』とその決意を詠んだ。

そして、天正十年(一五八二)六月一日、夕刻。

「殿!」

城の隅々まで良く通る声が呼んでいる。

戦場では幾度となく頼もしく聞いたこの齋藤利三の大声が、今日は特に心地よく光秀の

耳に響く。

「ご出馬の時刻ですぞ！」

愛宕神社で神のご意志を確認し、腹を決め、歌を詠み、遂にこの日を迎えた。

(いざ！ 天下に向けての出陣である)

日は、既に、西の空に沈み、残光が薄っすらと丹波の山並みを浮き立たせている中、明智軍一万三千は亀山城を出た。

数知れぬ合戦で一度も遅れを取ったことのない斎藤利三に率いられ、青地に桔梗紋の旗のもと、光秀の精兵は整然と城門を出ていく。

光秀は、知的な整った顔をいつになく晴れ晴れしく耀かせ、馬上の人となっていたが、その身体は『勝ち色』の赤い甲冑で固め、額には純白の鉢巻をりりしく締め、手には螺鈿の蜻蛉を見事に彫りこんだ軍扇を手にしていた。蜻蛉は『進みて退く事無き故』と、武者に好まれている。

城門の前では人々が(いつもの如く勝利を手にして帰って来る)と固く信じ、行軍していく兵士の中に見知った顔を見つけ出すや、手を振り、声をかけ、にぎやかに見送っていた。

この喧騒が去った後、光秀は馬の背に心地よく揺られながら、兵たちを頼もしく眺めていた。

(敵を指し示し、一言、「かかれ!」と采を振れば、彼らは命を賭け、死を厭わず奮戦し、目指す勝利、天下を手に入れることは良く判っている)と、光秀は満足し切った思いに浸りゆったりとした至福の時を過ごしていた。

「殿！ 士気はすこぶる盛んですぞ！」

全軍の指揮を取っている斎藤利三が、馬を制しながら近づき、明るく大声をかけて来た。「皆、足取り軽く行進しております」

兵たちの姿が松明の光に照り出され、かかげる無数の槍の穂先が鋭い光を放っている。(迷わなければ、事はたやすい!)

光秀の胸中は、成功の確信で満ち溢れていた。

(これが神の計らいでなくして、何であろうか?)

だが――、

